

教員アンケートでの「外国語活動について、おおよそのイメージはつかめている。」の肯定的回答が92%となっている。特別の教育課程によって、教員が外国語活動、英語に触れる機会が増えたり、研修を重ねたりしたことで、しっかりイメージをもって指導にあたることができた。

教員アンケートでの「幼稚園から中学校3年生まで配置している外国人指導助手（ALT）と協働し、児童の英語コミュニケーションを図る基礎となる能力の育成ができています。」の肯定的回答が77%であり、ALTと協働し、幼稚園から中学校3年生までの流れを意識した授業に取り組むことができた。一方で、「外国語活動について、T1として主体的に授業を行うことができる。」のアンケート項目に対しての肯定的回答は58%にとどまっている。ネイティブスピーカーのALTと協働して取り組めてはいるが、教員がALTをより効果的に児童と関われるように、授業を展開したり、組み立てたりすることが今後の課題となる。

児童アンケートの「外国語活動や英語の勉強は好きだ。」の肯定的回答が77%、「外国語活動や英語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う。」の肯定的回答が91%と、児童にとって外国語活動や英語が親しみのあるものになっていることがわかる。これは、大きな成果である。

同じく児童アンケートの「外国語活動や英語の授業では、発言や手を挙げるなど、積極的に参加している。」の肯定的回答が65%であった。習い事で英会話に取り組んでいる児童など、外国語活動や英語を得意と感じている児童がいる一方で、苦手意識を感じている児童も見られる。

ただ、このアンケート項目が「発言や手を挙げる」とあるように、全体の場で挙手をしたり発言をしたりする機会は少なくとも、児童同士で交流する場面では積極的に参加している様子の児童は多く見られる。発言や挙手のみにとらわれず、児童が積極的にコミュニケーションを図り、英語に親しめることが大切であるという視点を教員が持ち続けることが欠かせない。